九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

法称著「プラマーナ・ヴィニシュチャヤ」 : 第1章 現量(知覚)論の和訳 (9)

戸崎, 宏正

https://doi.org/10.15017/2328470

出版情報：哲學年報. 52, pp.1-14, 1993-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』

第1章現量（知覚）論の和訳（9）

戸　崎　宏　正

目　　次

Ⅸb　唯識説における「量果＝自証」説
Ⅸb1　知の自証性
Ⅸb2　所取形相・能取形相の迷乱性と容認
Ⅸb3　自証が量果である
Ⅸc　外境実在論における「量果＝自証」説
Ⅸc1　外境対象が存在するとしても量果は自証である
Ⅸc2　量は対象相似性である
Ⅸc3　量果と量とは対象を異にしない
Ⅸc4　「量果＝自証」の意味
Ⅸc5　所量は外境対象である
Ⅸc6　外境実在論の「対象の認識」説に対する疑問
Ⅸd　唯識説における所量・量・量果
Ⅸd1　所量・量・量果の措定は迷乱による
Ⅸd2　迷乱の意味
Ⅸd3　唯識性についての疑問に答える

［**Ⅸb1**］（86．11）まさにそれゆえに，

（知より）別個に認識されるべき（対象）が存在することはない。（また）それ（＝知）を認識するのは他（の知）ではない。なぜならば，所取・能取が存在しないから。それはそのように自ら輝き現われる（のみである）[1]。（38）

（すなわち）対象の特相（＝知がそれから生じること，そして知がそれに相似すること[2]）が否定されるから，如何なるものであれ（知より他のものが）認

識（anubhava）されるということはない。また，これ（＝知）を（認識するものは，その知自身より他の知では）決してない。なぜならば，その場合でも（＝知を認識する場合でも）所取・能取の特相（＝主客の相対性）が（ありえ）ないから。それゆえに（＝知であれ対象であれ，認識と相対的関係をもった他なるものは存在しないから[3]），知（として現われる[4]の）はただ知自身（による）のみであり（―すなわち，外境対象論者が考えるように認識されるべき他のものの実在が必要なのではなく[5]―），また，それ（＝知）も何か他のものを（認識する知では[6]）ない[7]。また，それ（＝知）がそれぞれ直覚されるということ（pratyakṣaprativedyatva）もまさにそれの本性（による）のみである[8]。それ（＝知）がその本性によって自ら輝き現われるというそのことに

（1） Cf. *PV* III, k. 327（拙著『仏教認識論の研究』下巻，大東出版，昭和60年，10頁；桂紹隆「ダルマキールティにおける「自己認識」の理論」南都仏教第23号，昭和44年，4頁参照。）

この偈は多くの文献に引用されている。それらについては，上掲拙著下巻，10頁－11頁，注(31)，本訳が依用したT. Vetterのテキスト，86頁注2を見られたい。ほかに，*Nyāyabhūṣaṇa*（ed. by Svāmī Yogīndrānanda, Vārāṇasī 1968），p. 107に引用（神子上恵生「シュバグプタの唯識説批判」南都仏教第48号，昭和57年，5頁；山上證道「Nyāyabhūṣaṇaの研究(2)」，京都産大論集第16巻4号人文科学系列第14号，昭和62年，40頁に訳出）されている。

（2） いわゆる対象の2条件である。Cf. *PVinT(D)*, 170a4：rnam par ḥjog paḥi rgyus＊ skyes pa daṅ ḥdra ba.（＊*P*. rgyu, *C*. *D*. rgyus.）Cf. *PVinT(B)*, 148. 1.

（3） *PVinT(D)*, 170a5－6：gaṅ gi phyir śes paḥam gshan ñams su myoṅ baḥi ḥbrel pa can gshan ḥgaḥ yaṅ yod pa ma yin pa *deḥi phyir*. Cf. *PVinT(B)*, 148.2－3.

（4） *PVinT(B)*, 148.3：*ñams su myoṅ byar* snaṅ ba.

（5） *PVinT(D)*, 170a6－7：ji ltar phyi rol gyi don du smra ba rnams kyis ñe bar brtags pa bshin du ñams su myoṅ bar bya baḥi dṅos po la ltos pa ma yin no. Cf. *PVinT(B)*, 148.3.

（6） *PVinT(B)*, 148. 3：don *gshan ḥgaḥ shig* raṅ gi ṅo bo myoṅ ba ni ma yin no.

（7） Cf. *PV* III, k. 326ab.（上掲拙著下巻，9頁－10頁参照。）

もとづいて“自己を顕照する（＝自己を認識する）”とも言われる。たとえば灯火のように[9]。“青等の認識（anubhava）”と言うも，（それは）それ（＝青等）を自相とした認識（が輝き現れる）のみである[10]。

［Ⅸb2］（88. 1）

（知は真実には）所受・能受の形相をもたない。（無明によって）迷乱された者たちに見られるのに従って，これ（＝知）は特相を異にした所取形相・能取形相（── それらは）惑乱（であるが）── をもつと措定された（までである）[11]。（翳眼者の）髪等の知における差別のように。その場合[12]，（知の）所取・能取の特相は非難されるべきで

（8） Cf. *PV* III, k. 326cd.（上掲拙著下巻，10頁参照。）

（9） Cf. *PV* III, k. 329.（上掲拙著下巻，12頁－13頁参照。）*PVinT(D)*, 170b 3－4：「灯火はまさに自ら輝くとき『自己を照らす』と言われる。つぎのことが述べられたのである：── この自証には所取・能取の差別は存在しない。しかし，自ら輝き現れるとき，『自己を把握する現量という自性をもつ』と言われる。」（snaṅ ba raṅ ñid rab tu gsal ba na bdag ñid gsal bar byed pa shes brjod pa yin no. ḥdi skad brjod pa* yin te, raṅ rig pa ḥdi la gzuṅ ba daṅ ḥdzin pa tha dad pa ni yod pa ma yin gyi, ḥon kyaṅ bdag ñid rab tu gsal ba na bdag ñid ḥdzin paḥi mṅon sum gyi tshad maḥi raṅ bshin du bstan pa yin no.*P*, brjod pa brjod pa, *C*, *D*, brjod pa.）

（10） *PVinT(D)*, 170b5：sṅon po la sogs paḥi raṅ gi ṅo bo ñid du gyur paḥi ñams su myoṅ ba gaṅ yin paḥo. Cf. *PV* III, k. 328cd.（上掲拙著下巻，12頁参照。）

なお，この断章（［Ⅸb1］）については，拙論「認識」（『岩波講座・東洋思想第10巻，インド仏教3』，1989所収），178頁1行－179頁14行を参照されたい。

（11） *PVinT(D)*, 171a8－b2：「意趣はこうである：── 無明者たちの無明はまさにこうである。すなわち真実（satya）でない本性を現わすことである。それゆえに，識（vijñāna）の“存在しない本性を現わし出す能力”は無明の習気である。また，それ（＝無明の習気）をもつから，知は自己を現わすとき，存在しない“所取形相”と“それに依存する能取（形相）”をもつものとして自己を現わす。」（dgoṅs pa ni ḥdi yin te, ma rig pa rnams kyi ma rig pa ḥdi ñid de, mi bden paḥi raṅ bshin rab tu ston paḥo. deḥi phyir rnam par śes paḥi med paḥi raṅ bshin ston paḥi nus pa ni ma rig paḥi bag chags yin la,de daṅ ldan pa las kyaṅ śes pa bdag ñid rab tu ston pa ñid na yod pa ma yin paḥi gzuṅ baḥi rnam pa daṅ, de la brten paḥi ḥdzin pa ñid bdag ñid ston par byed pa yin no.）

はない[13][14]。（39, 40）

（これらは）挿入偈である。

[Ⅸb3]（88. 10）

その場合（＝外境対象が存在しない場合[15]），他を認識するということは（ありえ）ないから，自証が果であると認められる[16]。（41ab）

（すなわち）まさに知は所取と能取の形相を現して生じる[17]（と主張する）者たち（＝唯識論者[18]）によれば，認識されるべき他なるものは存在しないのであるから（＝転倒した自性を現わした自身こそが認識されるのであるから[19]），

---

(12) ダルモッタラ（*PVinT(D)*, 171a7, 171b4），プトン（*PVinT(B)*, 149. 3, 149.4）は，gaṅ tshe(yadā)･･･de tshe(tadā) を gaṅ gi phyir(yasmāt)･･･deḥi phyir（tasmāt）と解する。それによれば，「それゆえに」と訳すべきである。

(13) *PVinT(D)*, 171b4－5：「所取・能取の特相――（それらは知）自身の相であり，（いわゆる唯）識論の三分（を構成するもの）であるが――，これは非難されるべきではない。」(gzuṅ ba daṅ ḥdzin pa dag gi mtshan ñid raṅ gi ṅo bo gaṅ yin pa ste, rnam par śes pa smra baḥi bloḥi rab tu dbye baḥi gsum gaṅ yin pa ḥdi la brtsad par bya ba ma yin no.) Cf. *PVinT (B)*, 149. 4－5.

なお，この断章（[Ⅸb2]）については，前掲拙論「認識」，179頁15行－181頁5行を参照されたい。

(14) kk. 39, 40＝*PV* III, kk. 330c－332b.（上掲拙著下巻，14頁－15頁参照。）なおこの2偈は *Nyāyabhūṣaṇa*, p.109に引用（山上證道，上掲論文(2)，44頁に訳出）されている。

(15) *PVinT(D)*, 171b7：gaṅ gi tshe phyiḥi don med pa *deḥi tshe*. Cf. *PVinT(B)*, 149. 6－7.

(16) ＝*PV* III, k. 332cd.（上掲拙著下巻，16頁－17頁参照。）

(17) *PVinT(D)*, 172a1－2：「それ（＝知）は，無明によって育成されて，非存在なる（所取）形相をも現わし，またまさに自らはその形相を把握する働きをなさないけれど“把握する働きをなすもの”として（自らを）現わして生じる。」(de ni ma rig pas ñe bar bsñad pas med paḥi rnam pa yaṅ ñe bar ston par byed pa daṅ, bdag ñid rnam pa deḥi ḥdzin paḥi byed pa ma yin yaṅ ḥdzin par byed pa ñid du ston par byed par skye ba.)

(18) *PVinT(D)*, 171b8：rnam par śes par smra ba *gaṅ dag gi*. Cf. *PVinT (B)*, 149. 7.

自証が果である。（それは，いわゆる）“対象の認識”が（勝義には[20]）それ（＝自証）を本質とするからである[21]。なぜならば，かの認識（＝能取形相を把握する認識[22]，すなわち自証）が好ましい，あるいは好ましくない形相（をもって）生じるとき，対象が好ましいもの，あるいは好ましくないものとしてそれぞれ知られ（決定され[23]）るから[24]。

---

(19) *PVinT(D)*, 172a2 : *rig par bya ba gshan med paḥi phyi*r phyin ci log gi raṅ bshin du ñe bar ston paḥi bdag ñid rig par bya ba yin paḥi phyir.

(20) *PVinT(B)*, 150. 2 : *don rtogs pa ni* don dam par raṅ rig pa *deḥi ṅo bo yin paḥi phyir*. *PVinT(D)*, 172a4 : gaṅ gi phyir don rtogs pa don rig pa ni don dam par raṅ rig pa yin pa deḥi phyir.

(21) Cf. *PV* III, k. 339cd. （上掲拙著下巻，24頁参照。）
PVinT(D), 172a3－4 :「もし『“我は外境の対象を認識した”と決知するが，“自己を（認識した”と決知し）ないではないか。認識も決知にもとづいて果と言われるのであって，それ自身（にもとづくの）ではない』と言うならば，（それは）正しい。しかし（われわれは）『自己を対象とすると決知されるから，自証が果である』と言うのではない。そうではなくて，（いわゆる）“対象の認識”が（勝義には）それ，すなわち自証，を本質とするからである。」（bdag gis phyi rol gyi don rig go shes ṅes gyi, bdag ñid do shes bya bar ni ma yin nam,rig pa yaṅ ṅes pa la ltos nas ḥbras bur brjod kyi raṅ ñid ni ma yin no she na, bden te ḥon kyaṅ bdag ñid yul du ṅes paḥi* phyir ni raṅ rig po**ḥbras bur brjod pa ma yin gyi ḥoṅ kyaṅ *don rtogs pa* gaṅ yin pa de ni raṅ rig pa *deḥi ṅo bo yin paḥi phyir ro*. **P*, ṅes par rig paḥi, *C*, *D*, ṅes paḥi. ***P*, rig paḥi, *C*, *D*, rig pa.) Cf. *PVinT(B)*, 150. 1－2.

(22) *PVinT(B)*, 150.3 : *ñams su myoṅ ba* ḥdzin paḥi rnam paḥi yul can *de*.
Cf. *PVinT(D)*, 172a6 : ḥdzin paḥi rnam paḥi yul can ñams su myoṅ baḥi *ñams su myoṅ ba de*.

(23) *PVinT(D)*, 172a7 : *so sor rig* ciṅ rnam par ḥjog go.

(24) Cf. *PV* III, k. 340. （上掲拙著下巻，24頁－25頁参照。）
PVinT(D), 172b1－2 :「以上のように，（唯）識論においては，“対象と執着される所取形相”が所量（prameya）であり，“能取形相”が量（pramāṇa）であり，“所取形相の認識”――（それは）自己の本性を認識することを自体としているけれども，まさに“所取の認識”と決知されるもの――が果である。」（de ltar rnam par śes par smra ba la gzuṅ baḥi rnam pa don du shen par byas pa ni gshal bya ba ḥdzin paḥi rnam pa ni tshad ma, gzuṅ

［Ⅸc1］（88. 17）外境対象が存在する（と認める）場合でも，対象は自証に従って[25]知られ（決定され）るのであるから，まさにそれ（＝自証）こそが果である（と言うの）が合理である[26]。

（88. 19）（すなわち）対象の自相がその（自相の）ままに決定されることはない。なぜならば，（もしそうであるならば，）すべての知が同一の形相をもつことになる過去におちいるから[27]。（同一の対象に対しても）形相は様々に知られる。なぜならば，同一の本性のものが，ある者には“心地よいもの”と（見られ），他の者には“心地よくないもの”と見られるから。もし「心地よいもの，また心地よくないものと顕現するのは分別であって，感官知ではな

---

baḥi rnam pa rig pa raṅ gi raṅ bshin rig paḥi bdag ñid yin yaṅ gzuṅ ba rig pa ñid du ṅes pa ni ḥbras du yin no.）Cf. *PVinT(B)*, 150. 4－5：des na rnam rig paḥi lugs la gzuṅ baḥi rnam pa gshal bya, ḥdzin paḥi rnam pa tshad ma, raṅ rigs ḥbras bu yin no.

(25) *PVinT(D)*, 172b2－3：「“自証に従って”とは楽等の形相をもった自証を超えることなしに（という意味である）。」（*raṅ rig pa ji lta ba bshin* shes bya bde la sogs paḥi rnam pa raṅ rig pa las ma ḥdas par.）Cf. *PVinT(B)*, 151. 1：bde ba la sogs paḥi rnam pa *raṅ rig pa ji lta ba bshin* gyi.

なお，ダルモッタは後（*PVinT(D)*, 175b8－176a2）でつぎのように言う。「所取形相が白や非白等と（自）証され，また同様に能取形相がかくかくのような楽や苦と正しく（自）証されるとき，そのように青あるいは非青が楽等の因として確定され，認識される。それゆえに，対象認識は自証を本質とする。」（ji ltar gzuṅ baḥi rnam pa dkar po daṅ dkar po ma yin pa la sogs pa ñams su myoṅ ba daṅ, de bshin du ḥdzin paḥi rnam pa bde ba daṅ sdug bsṅal ba ci ḥdra ba yaṅ dag par rig pa de ltar sṅon poḥam sṅon po ma yin pa bde ba la sogs paḥi rgyur rnam par ḥjog ciṅ rig pa deḥi phyir don rig pa ni raṅ rig paḥi ṅo do yin no.）

(26) Cf. *PV* III, k. 341ab.（上掲拙著下巻，26頁－27頁参照。）拙稿「後期大乗仏教の認識論」（『講座仏教思想』第2巻，理想社，1974），176頁－177頁参照。

(27) Cf. *PV* III, k. 341cd.（上掲拙著下巻，26頁－27頁参照。）なお，ダルモッタラによれば，これは「外境対象は他者として存在するではないか。それゆえに，それの認識こそが果である」（*PVinT(D)*, 172b3－4：phyi rol gyi don gshan yod pa ma yin nam, deḥi phyir de rig pa ñid ḥbras bu yin no.）と言う反論に答えたものである。 Cf. *PVinT(B)*, 151. 2.

い」と言うならば，（しかしそのようなことは）ない。なぜならば，それ（＝感官知）においても，（心身が）死兆（を表わしている）ときなど[28]では，不一致[29]（asadhāna）があると経験的に知られるから[30]。また，異なった（諸々の生類）について（見て）も，同一の特殊な声や香や味等が様々の生類の感官（知）に楽や不楽をもたらす（ことが経験的に知られる）から。それゆえに，対象認識は自証をこそ本性とする。

［Ⅸc2］（88. 30）これ（＝自証を本性とした対象認識[31]）を成立せしめるもの（＝量）は対象形相性[32]である。なぜならば，これは（対象）形相に従って顕現するのであるから[33]。

---

(28) *PVinT(D)*, 173b2：「"など"という語によって，特殊な病気に悩まされているときをも（含む）。」(sogs pa smos pa ni nad kyi bye brag gis thebs paḥi dus na yaṅ ṅo.) Cf. *PVinT(B)*, 151. 6.

(29) *PVinT(D)*, 173b2－4：「快調な状態においてあるものを"好ましいもの"と一度ならず認識していても，（死兆を表わした状態で）同じその所縁に目を向けるとき，好ましくない形相をもった眼知が直ちに生じるであろう。同様に，特殊な病気に悩まされているときも，以前では楽の形相をもった知が生じたその同じ所縁に対して，直ちに苦の形相をもった知が生じ，それによって偏見をもった者になる。」(ḥgaḥ shig ḥdod pa mṅon par dgaḥ bar bya baḥi gnas su lag cig ma yin par ñams su myoṅ ba yaṅ dmigs pa de ñid la lta ba ḥjug pa na de ma thag tu mig gi rnam par śes pa mi ḥdod paḥi rnam par skye bar ḥgyur ro. de bshin du nad kyi bye brag gis thebs paḥi tshe yaṅ yul gaṅ la sṅon bde baḥi rnam pa can* gyi rnam par śes pa skye bar ḥgyur baḥi dmigs pa de ñid la, mod la sdug bsṅal gyi rnam pa can gyi rnam par śes pa skye shiṅ gaṅ las sun byuṅ bar ḥgyur ba yin no. **P*, cam, *C*, *D*, can.) Cf. *PVinT(B)*, 151. 6－7.

(30) Cf. *PV* III, k. 344.（上掲拙著下巻，29頁参照。）

(31) *PVinT(D)*, 175a8－b1：raṅ rig paḥi raṅ bshin* du gyur pa don rtogs pa *ḥdiḥi*.（**P*, raṅ rig bshin, *C*, *D*, raṅ rig paḥi raṅ bshin.) Cf. *PVinT(B)*, 152. 5.

(32) *PVinT(D)*, 175b1：「対象と相似した形相，すなわち対象形相性。」(yul lta buḥi rnam pa ste, *yul gyi rnam pa ñid*.)

(33) *PVinT(D)*, 175b4－6：「つぎのことが説かれたのである：── 青の形相が顕現するとき，"好ましい形相をもったこの認識"（＝自証）は青を対象とす

[Ⅸc3] (88. 31) 対象の確立は自証を本質とするから自証ではあるが，結果的には「これは対象の認識である」と見なされる。まさにそれゆえに，量と果とは対象を異にしてもいない[34]。

[Ⅸc4] (90. 5)

(「対象の認識」の[35]) 本性を吟味したうえで，「自証が（量）果で

ると思い込まれる。・・・・それゆえに，（対象）形相をもった知において，“好ましさ等を本性とした認識”（＝自証）を対象について確立するのは，対象形相による。それゆえにまさにそれが量である。」(ḥdi skad brjod pa yin te, gal te sṅon poḥi rnam pa snaṅ na ni deḥi tshe ḥdod paḥi rnam pa can gyi myoṅ ba ḥdi sṅon poḥi yul can du brtags pa yin te……deḥi phyir śes pa rnam pa daṅ bcas pa la ḥdod pa la sogs paḥi raṅ bshin ñams su myoṅ baḥi gzuṅ baḥi rnam paḥi dbaṅ gis don gyi yul can du rnam par ḥjog pa yin pa des na de ñid tshad ma yin no.)

Cf. *PV* III, kk. 348cd, 349ab.（上掲拙著下巻，33頁－34頁では，筆者はDevendrabuddhi 等に従って，「対象形相＝量；自証＝量果」と解したが，それは訂正されるべきである。「対象形相＝量」であるのは，あくまでも「対象認識（――それは思い込みに過ぎないものではあるが――）＝量果」と見なされるときである。「自証＝量果」と見なされるときは，「知の能力性（＝能取形相）＝量」である。(Cf. *PVin* I, kk. 57, 58＝*PV* III, kk. 365, 366；*PV* III, k. 346.)

(34) Cf. *PV* III, kk. 349cd, 350abl（上掲拙著下巻，34頁－35頁）；*PVin* I, 82. 13－18（前稿(7)，9頁11－15）；*PV* III, kk. 314, 315abl（上掲拙著上巻，406頁－407頁)。

PVinT(D), 176a2－3：「まさに対象（に対して）量（＝対象相似性）の働きがあり，まさにそれ（＝対象）の認識が果である。それゆえに，果と量とは対象を異にしてもいない。」(yul ñid tshad maḥi bya ba yin pa daṅ, de ñid kyi rig pa ḥbras bu yin pa deḥi phyir *tshad ma daṅ, ḥbras bu dag yul tha dad pa yaṅ ma yin no.*)　Cf. *PVBh*, p. 394, 22－23：「日常的営為のレベルでは，果は対象に対してあり，量も同じ（その）対象に対してある。したがって，どうして対象が異なるであろうか。」(vyavahārāpekṣayā 'rtha eva phalam, artha eva pramāṇam iti kuto viṣayabhedaḥ.) ここで“対象に対する量の働き”とは如何なるものか，必ずしも明確でないが，おそらく，知を対象に関して決定するという機能を意味するのであろう（Cf. *PV* III, k. 347abc. 上掲拙著下巻，31頁－32頁参照)。

(35) *PVinT(D)*, 176a4－5：「対象の認識の本性は何か，と本性を吟味したうえ

ある。なぜならば，対象の認識（というも，それ）は，それ（＝自証[36]）を本質とするから」と言われたのである[37]。（42bcd）

［Ⅸc5］（90. 8）

（知が）それ（＝外境対象[38]）と相似するにせよ，異なるにせよ，（外境）対象も，そのように（＝青等の所取形相と楽等の能取形相をもって[39]）顕現する知の因である。したがって，（外境）対象が所量と認められる[40][41]。（43）

［Ⅸc6］（90. 12）

もし「何らかの状態にある（＝ある因による[42]）対象相（＝相似性[43]）

で。」（don rig paḥi raṅ bshin gaṅ shig ces *raṅ bshin sems pa∗ na*. ∗ *P*, sems dpaḥ, *C*, *D*, sems pa.）Cf. *PVinT(B)*, 153. 2.

(36) *PVinT(D)*, 176a5：*deḥi bdag ñid yin paḥi phyir* te, raṅ rig paḥi raṅ∗ bshin yin paḥi phyir ro.（∗ *P*, naṅ, *C*, *D*, raṅ.）Cf. *PVinT(B)*, 153. 2.

(37) ＝*PV* III, k. 350b2cd.（上掲拙著下巻，35頁参照。）

(38) *PVinT(B)*, 153. 3：śes pa phyi don *de daṅ ḥdra ba*.

(39) *PVinT(D)*, 176b4：*de ltar* shes bya ba sṅon po la sogs pa gzuṅ baḥi rnam pa daṅ, bde ba la sogs pa ḥdzin paḥi rnam par. Cf. *PVinT(B)*, 153. 4：*de ltar* gzuṅ ḥdzin gyi rnam par.

(40) *PVinT(D)*, 176b5−7：「この意趣はこうである：──（二つのものの）相似性の確定は両者の知覚に依存する。（しかし，）有相論者（sākāravādin）によれば，対象は先に如何なるものによっても知覚されないから，どうして相似すると知られようか。自己として認識される通りにそれ自体があるのではなく，楽等の原因として決知されると認められる。それゆえに，相似することはない。」（dgoṅs pa ni ḥdi yin te, ḥdra bar ṅes pa ni gñi ga mthoṅ ba la rag las pa yin la,rnam pa daṅ bcas paḥi phyogs la don ni sṅar gaṅ gis kyaṅ mthoṅ ba ma yin na, de ci ḥdra bar brtag, raṅ ñid kyis kyaṅ ji ltar ñams su myoṅ ba deḥi bdag ñid ma yin yaṅ bde ba la sogs paḥi rgyu ñid du ṅes par ḥdod pa des na ḥdra ba ma yin no.）

つまり，外境対象と知との間に相似関係は認められないから，外境対象が知の因であることのみにもとづいて所量と認められるべきである，という意見である。しかし，この見解では，因であればすべて所量であることになる不合理が生じる。その点がつぎの偈に述べられる。

(41)＝*PV* III, k. 351.（上掲拙著下巻，36頁参照。）

なくしてそれ（＝知）が顕現するとき，どうして『（外境）対象の把握』であろうか」と言うならば，（それは）正しい。私もそのようなものを知らない[44][45]。（44）

（これらは）挿入偈である。

［Ⅸd1］（90. 17）もし「外境対象が存在しないならば，どのようにして量・所量・果は措定されるか」と言うならば，こ（の疑問）に対してはすでに「この措定は（迷乱にもとづく）顕現に従ったものであって，まさにそれ自体に従ったものではない」と述べられた[46]。（すなわち）何らかの対象形相と内的決定者（＝能取形相[47]）とは，（知が）自証を本性として生じるとき，（迷乱によって[48]）現われるのである[49]。それ（＝そのような知）におけるこの量・所量・果の確立は（迷乱によって）現われた姿[50]に従ったものに過ぎない。

---

(42) *PVinT(D)*, 176b8 ; *PVinT(B)*, 153. 6 : *ji ltar rnam pa* ḥgaḥ shig ltar* te**, rgyu ḥgaḥ shig las. **P*, par, *C*, *D*, pa,** *P*, ste, *C*, *D*, te.

(43) *PVinT(D)*, 176b8 ; *PVinT(B)*, 153. 7 : *don dṅos* te ḥdra ba.

(44) *PVinT(D)*, 177a1－2 :「外境対象（実在）論者にこそ（それを）尋ねるべきである。外境対象（の実在）を容認する者にこのような過失が生じるのである。・・・・（しかし，）私はそのような（外境対象の実在を）容認しない。」（phyiḥi don du smra ba ñid la ḥdri bar bya ba yin te, gaṅ shig phyiḥi don khas len pa de thal ba ḥdir ḥgyur ro.・・・・kho bo ni de ltar mi ḥdod do.）

(45)＝*PV* III, k. 352.（上掲拙著下巻，37頁－38頁参照。）

(46) Cf. *PVin* I. kk. 39. 40.

(47) *PVinT(D)*, 177a6 :「"内的決定者" とは対象形相を把握するもの（＝能取形相）である。」（*naṅ du yoṅs su gcod pa* ni yul gyi rnam pa ḥdzin pa ste.）Cf. *PVinT(B)*, 154. 3.

(48) *PVinT(D)*, 177a6 : ḥkhrul paḥi phyir ro. Cf. *PVinT(B)*, 154. 4.

(49) *PVinT(D)*, 177a6－7 :「自証を本性とするまさにその知は真実在でない所取形相・能取形相 ── （それらは）自己に存在しない ── を現わして生じるという意味である。」（raṅ rig paḥi raṅ bshin gyi śes pa de ñid ni mi bden paḥi gzuṅ ba daṅ ḥdzin paḥi rnam pa raṅ la med pa kun tu ston pa skyeḥo shes bya baḥi don to.）

(50) *PVinT(D)*, 177a8 : *ji ltar* ḥkhrul pas *mtshon pa (kho na) ltar*.

（すなわち，）

知自体は（勝義には）区分をもたないが，（無明によって）誤った知覚をもった者たち[51]によって，あたかも（知自体が）所取（形相）・能取（形相）・認識という差別をもつかのように見られる[52]。（45）

たとえば呪文等によって眼が惑乱された者たちに，泥塊等が別様に（＝象等のように）顕現する。（泥塊等は）その相（＝象等の相）をもたないのに[53]。（46）

なぜならば，眼が惑乱されていない者は，それらをまさにそのように見ないから。あるいはたとえば，砂漠において遠くに（あるものは，）小さいものでも大きく見られるように[54][55]。（47）

そしてこの所量・量・（量）果の措定は（勝義にはありえ）ないけれども，（無明によって迷乱した[56]）“現われ”（anudarśana）に従って，所取・能取・認識についてなされる[57]。（48）

---

(51) *PVinT(D)*, 180b7－8：「無明によって誤った知覚をもち，惑乱された者たち。」（ma rig pas *mthoṅ ba phyin ci log* du gyur ciṅ rnam par bslad par gyur pa gaṅ yin pa de dag *rnams*.）Cf. *PVinT(B)*, 154. 6－7.

(52)＝*PV* III, k. 353.（上掲拙著下巻，40頁－41頁参照。）なおこの偈は *Nyāyabhūṣaṇa*, p. 57に引用（山上證道「Nyāyabhūṣaṇa の研究(1)」，京都産大論集第14巻1号人文科学系列第11号，昭和59年，160頁に訳出）されている。

(53)＝*PV* III, k. 354.（上掲拙著下巻，41頁－42頁参照。）なおこの偈は Kamalaśīla の *Madhyamakālaṃkārapañjikā*（M. Ichigo, *MADHYAMAKĀLAṂKĀRA*, Buneido 1985, p. 161）に引用されている。

(54) *PVinT(D)*, 181a4－5：「砂漠，すなわち木や水のない場所，（では）それは糞の塊（のように小さいものであって）も遠くからは山ほどの大きいものに見られるであろう。」（mya ṅam śiṅ daṅ chu med paḥi phyogs te, de lci baḥi dum bu yaṅ rgyaṅ riṅ po nas riḥi tshad tsam du mthoṅ bar ḥgyur ro.）Cf. *PVinT(B)*, 155. 2－3.

(55)＝*PV* III, k. 355.（上掲拙著下巻，42頁参照。）なお k. 47cd は Śāntarakṣita の *Madhyamakālaṃkāravṛtti*（M. Ichigo, op. cit., p. 160）に引用（一郷正道『中観荘厳論の研究』，文栄堂，昭和60年，153頁に訳出）されている。

(56) *PVinT(D)*, 181a6：*ji ltar* ma rig paḥi rjes su ḥgro baḥi ḥkhrul paḥi *snaṅ ba*.

もしそうでないならば，（しかし）相互に異なった相を顕現する（所取等の）もろもろの形相が，どうして一者なるものに真実在として存在するであろうか。（一者なるものに多数性はありえない。）なぜならば，それの一者性を損なうから[58]。(49)

また他者（＝多者）の他者性（＝多数性）を損なうから。無差別者（＝一者）（とみなすこと）も（でき）ない。なぜならば，（そのような形相をもった知に“一つ”の）相は見られないから。実に相の無差別を見る知が無差別を決定する[59]。(50)

（それゆえに[60]）ものは何らか（の本性のもの）として見られるが，その本性が真実に存在することはない。なぜならば，それらには，本性が一者としても多者としても存在しないから[61][62]。(51)

---

(57)＝*PV* III, k. 356.（上掲拙著下巻，43頁参照。）なおこの偈は *Nyāyabhūṣaṇa*, p. 57に引用（山上證道，上掲論文(1)，160頁－161頁に訳出）されている。

(58)＝*PV* III, k. 357.（上掲拙著下巻，43頁－44頁参照。）なおこの偈は *Nyāyabhūṣaṇa*, p. 58に引用（山上證道，上掲論文(1)，162頁に訳出）されている。

(59)＝*PV* III, k. 358.（上掲拙著下巻，44頁－45頁参照。）

(60) *PVinT(D)*, 181b2：deḥi phyir.

(61) *PVinT(D)*, 181b3－5：「（これは）つぎのことを述べているのである。すなわち，外境対象が存在しないので，知一者のみが顕現するのであるから，『これは一者として顕現する』（と言うの）が合理であるが，（しかし現実には）多者として顕現する。それゆえに，これは一者性を本性とするものではない。それゆえに，この顕現は一者ではない。多者でもない。なぜならば，所取形相と能取形相は実在ではないから。」（ḥdi skad brjod pa yin te, phyi rol gyi don med paḥi phyir rnam par śes pa gcig kho na snaṅ bas ḥdi gcig ñid du snaṅ bar rigs pa yin na, du mar snaṅ ba deḥi phyir ḥdi ni gcig gi raṅ bshin ma yin no. deḥi phyir snaṅ ba ḥdi ni gcig ma yin la du ma yaṅ ma yin te, gzuṅ ḥdzin gyi rnam pa dag dṅos po ma yin paḥi phyir ro.）Cf. *PVinT(B)*, 156. 2－3. なお，後注(66)参照。

(62)＝*PV* III, k. 359.（上掲拙著下巻，45頁－46頁参照。）なお此の偈は Śāntarakṣita の *Madhyamakālaṃkāravṛtti*（M. Ichigo, op. cit., p.178）に引用（一郷正道，上掲著，155頁に訳出）されている。

[Ⅸd2] (94. 1)

(敵者の反論：――) 世間では実に，類似した性質を知覚して，同一でないものを同一と決知することによって迷乱が生じる（と言われる)。しかし，ここでは（＝唯識説においては）それ（＝類似した性質の知覚）は（認められ）ない[63]。(52)

なぜならば，同一（とみなされるという）実体そのものが（唯識説によれば）この世界に一つも見られないから。（それゆえに，唯識説においては迷乱そのものがありえないはずである。)

(答：――) (そのような) これ（＝迷乱）もあるけれども，しかし内的惑乱（＝無明等）から生じる（迷乱もある）[64][65]。(53)

それは，（無明等の）欠陥によって生じるから，本来的に虚妄な顕現をもつ。類似した性質の知覚等を必要としない。たとえば翳眼知等のように[66][67]。(54)

---

(63)＝*PV* III, k. 360.（上掲拙著下巻，46頁参照。)

(64) *PVinT(D)*, 182a2－3：「“も”という語によって，他にもあるという（ことが述べられたのである)。類似した性質という因を必要として仮託をなす迷乱は分別である。（しかし）他に無分別（の迷乱）もある。（それは）類似した性質を必要としない。内にある惑乱から生じる。それは・・・・」(*yaṅ* gi sgras ni gshan yaṅ yod do shes bya baḥo. chos mtshuṅs paḥi rgyu mtshan la ltos nas sgro ḥdogs par byed paḥi ḥkhrul bar ḥgyur ba ni rtog pa ñid yin gyi, gshan rtog pa med pa gaṅ yin pa de yaṅ chos mthun pa la ltos pa ni ma yin te, *naṅ* na gnas paḥi *bslad pa las byuṅ ba gaṅ yin pa de*••••)

(65)＝*PV* III, k. 361.（上掲拙著下巻，46頁－47頁参照。)

(66) *PVinT(D)*, 182a8－b1：「区分を本性として顕現するそれ（＝所取形相等）も一者ではない。なぜならば，そのように（＝一者として）認識されないから。多者でもない。なぜならば，知とは決して別個のものではないから。」(rnam par phye baḥi raṅ bshin du rab tu gsal ba de yaṅ gcig ni ma yin te, de ltar ñams su myoṅ ba med paḥi phyir ro. du ma yaṅ ma yin te, rnam par śes pa las tha dad pa ḥgaḥ yaṅ med paḥi phyir ro.) Cf. *PVinT(B)*, 157. 1－2：gzuṅ ḥdzin du snaṅ ba de gcig min te, gcig tu ma myoṅ baḥi phyir, du ma min te, śes pa las tha dad med paḥi phyir.

（これらは）挿入偈である。

［Ⅸd3］（94. 14）もし「これ（＝所取・能取の顕現[68]）がただ知の立ち現れにすぎない（唯識，vijñaptimātra）ならば，量等の確立は（迷乱による[69]）“現れ”に従ってなさる（と言える）であろうが，（しかし）まさにそのこと（＝外境対象は存在しなくて，ただ知の立ち現れにすぎないこと[70]）はどうし知られるか」と言うならば，こ（の論難）に対してはすでに「（知は）所取・能取の特相をもたないから」と述べた[71]。

---

(67)＝*PV* III, k. 362.（上掲拙著下巻，47頁参照。）

(68) *PVinT(B)*, 157.2：gzuṅ ḥdzin du snaṅ ba *ḥdi*.

(69) *PVinT(D)*, 182b3：ḥkhrul paḥi rjes su ḥbraṅs nas.

(70) *PVinT(B)*, 157. 3：phyi rol gyi don med ciṅ rnam par rig tsam du gnas pa *de ñid*.）

(71) *PVinT(D)*, 182b4－5：「師（法称）も先に（毘婆沙師等の）無形相論（nirākāravāda）に対して，“知が能取であり，（外境）対象が所取であること”を否定した。また，（経量部の「外境対象の実在を認める）有形相論」（sākāravāda）に対しても，唯識説（vijñaptivāda）を（説き）始めるときに，『所取の特相は（知の）輝きである』（cf. *PVin* I, k. 38）と述べられた。（そのことがいま）“すでに述べた”と言われたのである。」（slob dpon gyis kyaṅ rnam pa med paḥi phyogs la śes pa ḥdzin pa ñid daṅ, don gzuṅ ba ñid sṅar bsal＊ la, rnam pa daṅ bcas paḥi phyogs la yaṅ rnam par rig pa smra ba rtsom pa ñid kyi tshe gzuṅ baḥi mtshan ñid gsal ba yin no gsuṅs pa ni *bśad zin to* shes bya ba yin te. ＊*C*, *D*, gsal, *P*, bsal.）*PVinT(B)*, 157. 4－5：「先に無形相論に対して，“対象が所取であり，知が能取であること”を否定した。有形相（論）に対しても，所取の特相が知の立ち現れ（vijñapti）であることを（説き）始めたときに，『所取・能取の特相をもたないから』（cf. *PVin* I, k, 38）と述べた。」（rnam med kyi lugs la don śes gzuṅ ḥdzin yin pa sṅar bsal la, rnam bcas la yaṅ gzuṅ baḥi mtshan ñid rnam rig pa rtsom paḥi＊ tshe *gzuṅ ba daṅ ḥdzin paḥi mtshan ñid daṅ mi ldan paḥi phyir ro shes bśad zin to*.＊ テキストの poḥi を訂正。）